
IDOLM@STER ~ 紅玉煌姫 ~

Scarlet ZoomAir After The Fainal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IDOLM@STER〜紅玉煌姫〜

【Nコード】

N7820Z

【作者名】

Scarlet ZoomAir After The Fair
nai

【あらすじ】

私の代表作？の私とAクラスと召喚獣から主人公を登場させたIDOLM@STERの二次創作。なんでプロデューサーが主人公は多いのにアイドルの主人公が少ないんだろうと思いつつ書いた駄作者が描くストーリー。どうぞ駄作者を罵倒しながらお読み下さ（殴IDOLM@STERの二次は初めてなので色々指摘して下さい下さると助かります。感想などもお待ちしております

prolog

そこでは熱気が止まず、たくさんの人々が声を上げ、叫んでいる。彼らが向ける視線はただ一人。セットの上で彼らに向かって手を振っている人物だ。

「みんな、私のライブに来てくれて有難うっ！」

その人物がそう言った瞬間。彼らの口から雄叫びが発せられる。

「残念なことに時間もなくなって、次がラストになると思います。」

その言葉には本当に残念な気持ちがかかるなにかがあった。

「私のライブ、最後の曲聞いてね？最後は『Fragments of Darkness』っ!!！」

彼女がそう叫ぶと同時に曲が流れ出す。彼女はその曲に合わせて踊る。激しい曲調のこの曲に美しく踊る。その様子にファンである彼

らもテンションが最高点に達する。

汗がセットの光で煌めき、神秘的なその姿に誰もが見惚れ、緋色の眼が射抜く。トドメといわんばかりに彼女は歌いだす。

「星達が煌めき月光に照らされたこの世界で私が目指すのは影。」

「闇に閉ざされたその絆、今解き放ち月に返そう。」

「物語のようなその闇はきつと限りない苦難にさいなまれるだろう。」

「立ち上がれ！立ち上がれ！光を捨て闇に生き、誇りを捨て友の為にっ！！」

激しいステップと激しい振り付けが強いられるこの曲で息継ぎをする場面も必然と少なくなるこの歌を歌う為には半端じゃないほどの練習が必要となる。間違ったら死ぬのではないかという程の努力が必要となる。彼女はそれだけこのアイドルという職業に誇りを持ち、命を掛けているのだ。

ライブは無事に終了し、事務所へと帰る車の中で彼女のマネージャー

「である『カイトビ海旅シン沁』は彼女に予定を告げる。」

「桜華、今日のこの後の予定は特にない。今日はライブでFragments of Darknesもやっんだから疲れただろう？帰ったらゆっくりと休め。」

「わかったわ。沁さんこそ体調なんて崩さないでね？」

「わあってるよ。」

彼女の名前は『アマツキ天月オウカ桜華』。765プロ所属のアイドル。桜華一人のアイドルグループ『コウギョクコウキ紅玉煌姫』で活躍するアイドルだ。彼女は幼少の頃から絶え間なく努力に努力を重ね、今のトップクラスのアイドルとして活躍している努力の天才だ。確かに才能もあったのだろうが、それに構わず努力を怠らなかつた結果がこれだ。

「……しばらく事務所の皆と一緒にいるのも一興かしらね。」

「おいおい……。まあ、レギュラー番組もお前の希望で取ってないしな……。少しの時間なら大丈夫だろうが……。アイドルに誇りを持つてるお前がそんなこというなんてな。」

「まあ、ね。少し同じ事務所の仲間として心配だね。」

「ほほう？まあ、お前のことだからまた厳しい事を言うのだろうがな。」

「あ、あれでも結構我慢してるのよっ！？それに……いえ、なんでもないわ。」

「……ふーん。まあ、いいがね。」

友達のように話す二人。そこには確かな信頼があった。

一之会

午前1時17分。私が11時30分に終えたライブから帰った時間だ。やはりもう深夜になっていいるからか事務所には765プロのアイドル達は一人もいない。おそらく午後10時頃に帰ったのだろう。あの子達はまだ売れている訳じゃないから早く帰るのだ。

そんな中、扉がしまる音で私が帰ってきたことがわかったのか765プロで働く女性の一人である『音無^{オトナシ} 小鳥^{コトリ}』さんが私に話しかけてきた。

「お帰り天月さん。今日のライブすごかったわ」

「見てくれてたのね。ありがとう。そう言ってもらえるととても嬉しいわ。」

「どういたしまして」

私がお礼を言うと笑顔で答えてくる。やっぱり小鳥さんは良い人だ。他のアイドルに気を使って、普通の仕事もきっちり過ごしているのにその疲れが見せない。

その姿は一流の仕事人だといえる。そういったところとかは私にと

つて尊敬出来る人の一人だ。

「小鳥さん、少しお願いがあるのだけれど……いいかしら？」

「んー……、内容によるわね。」

まあ、そうでしょうね。無理難題をふっかけられちゃお終いだし。

「簡単な事よ。私、次の仕事早いからここで寝かして貰えないかしら？ 鍵なら私は合い鍵持つてるし、閉めてから仕事行くから……ダメかしら？」

「それくらいなら大丈夫だけど……最近ほとんど寝てないんですよ？ 困みにだけどいつからなの？」

「4時からよ。まあ、用意とかを考えると3時には起きないといけないわね。それと寝るまでの時間を加えたら大体1時間程度寝れたら良い方かしら？」

こうして小鳥さんが私にスケジュールを聞いてくるのには訳がある。普段アイドル達のスケジュールは事務所内にあるホワイトボードに書き込んで行くのだが、私の場合、秘密主義もあって書き込んではいないのだ。それに沁さんが私のスケジュールを一応管理してくれてはいる。伊達にマネージャーを名乗ってはいないのよ。私も聞かされたことはいつもウェストポーチに入れて持ち歩いているスケジュール帳に書き込んでるので、沁さんがいなくてもなにをすれば

良いかわかるから心配ない。

因みにこのスケジュールを完全に把握しているのは沁さんだけだ。765プロの社員はなんとなくわかってはいるのだ。私が過密で沢山の仕事を毎日こなしていることを。時にはご飯を一日中食べずに仕事をし、時には体調を崩してもそれを表に出さずに頑張っていることを。社員は一樣に心配し、時には泣き出し、休みをとるようにしつこく勧めるような社員もいた。けれど私は辞めなかった。

自惚れているかのように聞こえるかもしれないが、私が辞めてしまうと765プロは潰されてしまう。それ程までに弱者の立ち位置にいるのだ。この事務所は。

961プロが私に妨害を仕掛けてくるのはそうだったことも関係しているのだと私は思っている。まあ、仕方がない。765プロは961プロにとつたら邪魔でさかないのだから。弱小事務所が上に上がってこようとしているのだ。蹴落とそうとするのは当たり前だ。

話が逸れたが、なにが言いたいかはわかってくれたと思う。

つまり、私が休業、もしくは仕事を減らすと社員に与える給料が減り、リストラされる社員がでる。自分から辞める社員もでるだろう。私は偽善者でも正義の味方でもないけれど、せめてこれだけは守りたい。ここにいて、私をスカウトしてくれた社長とこの事務所で働く社員だけは。

その思いを小鳥さんは理解してくれる。だから何も言わない。いつものように笑顔で接してくれる。私の疲れが少しでもとれるようにと願掛けながら……。人間だから時々心配や疲れといった表情をする時もあるけれど、それを含めて彼女は尊敬できる。

「……わかったわ。社長にも言うておくわね？」

「ありがとう……お願いするわ。」

今もこうして心配そうな表情をしつつも何も言うてこない。小鳥さんなりの優しさが滲んでくる。

「ただ、私も一緒に泊まるわ。ついでに一緒に寝ましょ。」

「私なら大丈夫なのに……。まあ、いいわ。仮眠程度だし、一緒に寝るのもまた良いかもしれないしね。」

誰かと一緒に寝るなんて小学生いらいだわ。それにこんな職業しているから遊んだり、泊まりに行ったりなんてしたことなかったしね。……今思えば私、友達いないじゃない。笑えるわね。まあ、いつか……一方的に友達だなんて思っていると相手に嫌な気持ちさせちゃうかもしれないしね。

私はまだ孤独でいい。せめてあの子達が一流のアイドルになるまでは……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7820z/>

IDOLM@STER ~ 紅玉煌姫 ~

2012年1月2日08時47分発行